

地球電磁気・地球惑星圏学会

**SOCIETY OF GEOMAGNETISM AND EARTH,
PLANETARY AND SPACE SCIENCES (SGEPSS)**

第151号 会 報 1996年2月12日

1996年地球惑星科学関連学会合同大会 SGEPSS固有セッションスケジュール概要

3/26 (TUE)	午前	電磁圏(オーロラ) D会場 9:00~12:15	磁気圏(境界層) G会場 9:00~12:15	左のセッションの ポスター掲示 コアタイム 16:30~17:15 19:00 撤去
	午後	電離圏 D会場 13:15~16:30	太陽圏 G会場 13:15~16:30	
3/27 (WED)	午前	磁気圏(地球近傍) J会場 9:00~12:15	大気圏(化学) G会場 9:00~12:15	左のセッションの ポスター掲示 コアタイム 16:30~17:15 19:00 撤去
	午後	惑星磁気圏・探査 B会場 13:15~16:30	大気圏(力学) D会場 13:15~16:30	
3/28 (THU)	午前	電磁圏(サブストーム) D会場 9:00~10:30		左のセッションの ポスター掲示 コアタイム 29日 12:15~13:00 14:00 撤去
		総会 D会場 11:00~12:30		
	午後	特別講演会 万博ホール 14:30~16:30		
		懇親会 17:30~		
3/29 (FRI)	午前	モデリング・ シミュレーション A会場 9:00~12:15	岩石磁気・古地磁気 磁気異常・主磁場ダイナモ E会場 9:00~12:15	
	午後	磁気圏(尾部) B会場 13:15~16:30	電気伝導度 地殻活動電磁気学 E会場 13:15~16:30	

目 次

合同大会総会・固有セッション日程概要 1 第99回総会並びに講演会開催のお知らせ (第7回地球惑星科学関連合同大会) 2 第184回運営委員会報告 3 新入会員 4 第1回 合同欧文誌に向けての作業委員会 議事録 4 学会誌編集長推薦委員会報告 4 地球物理学研究連絡委員会議事抄録 7 来年度の総会並びに講演会の予定について 8	大林奨励賞メダルのデザイン公募のお知らせ 8 第2回大気化学討論会のお知らせ 8 学会創立当時の思い出 9 人事公募 10 研究助成金案内 10 SGEPSS Calendar 11 学術会議便り 12 合同大会日程概要 14
---	--

第99回総会並びに講演会開催のお知らせ(第7回地球惑星科学関連合同大会)

前号の会報でもお知らせした通り、第99回総会並びに講演会は第7回地球惑星科学関連合同大会として大阪大学豊中キャンパスで1996年3月26日(火)～29日(金)に開催されます。プログラムの概要がこのほど定まりましたので、お知らせいたします。固有セッションについては表紙に、全体プログラムについては裏表紙に掲載いたしましたので、ご参照ください。全体プログラムは多少簡略化しました。ご注意ください。

今回の合同学会では、合同プログラム委員会からポスターセッションを充実させるべく内容の濃い発表はなるべくポスターとして発表して欲しいという働きかけがありました。これに応じて、SGEPSSの固有セッションの企画においては、ポスターに重点を置くと同時に、口頭発表の内容も充実させるために講演時間を12分から15分に変更してプログラム編成をしました。

3/29日の固体地球関係の4つのセッションは同一会場にて「岩石磁気・古地磁気」「磁気異常・主磁場ダイナモ」を午前に、「電気伝導度」「地殻活動電磁気学」を午後に開きます。

また、超高層関係のセッションについては、これまで空間領域と物理過程による分類が混在していたのを整理して、研究対象となる空間領域で大分類することを試みました。特に、領域による分類という方針を明確にするために、磁気圏と電離圏の両方の領域に関与する「オーロラダイナミクス」および「電離圏磁気圏結合」という従来のセッションは、「電磁圏(オーロラ)」と「電磁圏(サブストーム)」に変更してみました。同様に、「大気圏力学」および「大気圏化学」も、各々「大気圏(力学)」と「大気圏(化学)」にしました。従来の「プラズマ波動」、「ULF波動」の講演は関連する領域のセッションに含めました。一方、特定の領

域による分類があまり適さない講演もありますので、今回は、集まった講演の数と内容を考慮して、「惑星磁気圏・探査」と「モデリング・シミュレーション」という二つのセッションを設けました。

今回の合同学会では、プログラム作成において以上のような試みをさせて頂きましたが、今後も、より良い講演会プログラムとなるように検討を重ねて行きたいと思っております。会員皆様の御意見を運営委員(E-mail: sgepss@kurasc.kyoto-u.ac.jp)にまでお寄せください。

合同学会会期中に当学会第99回総会が開催されます。学会の財務、合同欧文誌、等重要事項の審議を予定しております。広く会員の方々のご意見を必要としますのでご出席をお願いいたします。

日時 3月28日 11:00～12:30
場所 D会場

主な予定議題・審議事項等

1. 平成7年度決算/平成8年度予算
2. 田中館賞授与
3. 合同欧文誌について

なお、参加費等は以下の通りです。

1. 大会参加費	一般(会員)	1,500円
	一般(非会員)	2,000円
	学生・院生	1,000円
2. 予稿集	前納	3,500円
	当日	4,500円
3. プログラム代	(別途購入時)	500円
4. 懇親会	一般(前納)	5,000円
	(後納)	6,000円
	学生・院生(前納)	3,000円
	(後納)	3,500円

第184回運営委員会報告

日時 平成8年1月19日(金) 13:00-17:00

場所 国立極地研究所 研究棟2階 第4会議室

前回の議事録が承認された後、以下の諸報告がなされた。

1. H7年度決算及びH8年度予算について、3月の合同大会総会で報告・承認してもらうための資料作成を3月2日(土)東大震研で午前10時から行う。(会計担当)
2. 151号の会報を2月上旬に発行するために、合同大会案内、運営委員会、各作業員会大林賞メダル図案公募、人事募集、研究集会派遣等の記事原稿のe-mail提出締め切りを1月29日(月)とする。(庶務担当)
3. 3月26-29日、大阪大学豊中キャンパスで開催する1996年地球惑星科学関連学会合同大会の準備状況について、当学会固有の226件もの投稿論文を新しいセッション名毎に分類したプログラムが紹介された。3月28日の総会では、予算・決算の審議、各賞の授与等重要な審議が予定されているが、14時30分から万博記念公園内のホールで開かれる特別講演会場への移動のために、総会の開催時間は11時から13時までに限られることになった。(春期合同大会担当)
4. 10月21-24日、郵政省通信総合研究所で開かれる次々期学会については、第100回大会でもあり記念事業等を計画する事になった。(秋期大会担当)
5. 1997年合同大会は、平成9年3月24日(月)-28日(金)に名古屋大学旧教養部で開催する準備が進められている。(連絡会幹事、渉外担当)
6. 学会賞について
 - ・前回の評議員会で、田中館賞受賞者として2名の会員が決定されたので、春の学会で授与する。(会長)
 - ・1月12日の大林賞作業員委員会で、候補者の調査、メダルの作成、内規の修正等について審議した。(作業員長)
7. 平成7年11月1日のJGG編集員会で、論文の進捗状況、JGG論文奨励賞の候補選考方法の見直し、学会誌委員長推薦委員会の3名の委員について検討・審議した。(雑誌担当)
8. 1月11日の学会誌委員長推薦委員会において、河野長前学会誌委員長を後任期2年間として新委員長に選出した。新副委員長・委員については、新委員長が会長と協議の上選出し、3月中旬に会長がこれを委嘱する。(会長)
9. 学協会著作権協議会への複写権委託契約中止についての経過報告がなされた。JGG誌問題検討WGでも著作権及び複写権について検討し、学会として対応していく必要がある。(会長)
10. 各研究助成・集会助成等についての応募状況・結果と山田科学振興財団、神奈川科学技術アカデミー、三菱財団自然科学研究のH8年度助成についての報告がなされ、運営委員から各会員に周知する事になった。(総務担当)
11. その他の報告(総務)
 - ・1996年プラズマ理工学国際会議、チャップマン国際会議等の案内。

- ・日本惑星科学将来計画専門委員会中間報告の紹介。
- ・第17期の日本学術会議への団体登録に関する説明会が2月7-8日に開催。
- ・1996年11月15-20日に、「Geophysics Beyond 2000」についての第2回国際セミナーがインドのハイデラバードで開催。
- ・京都大学防災研の大部門化、全国共同利用化の改組内示にあたり、学会長への礼状。

また、以下の議事について審議がなされ、承認された。

1. 新入会員承認・退会者確認について
 - ・正会員一名正会員(学生)一名の入会が承認された。
2. 学校科目「地学」関連学会連絡協議会の申し合わせの案文について
 - ・広報担当から説明がなされ、審議した結果、これを承認した。引き続き広報担当がこの協議会に出席することになった。また、中央教育審議会に教科「理科」関連学会協議会から出された、次期教育課程に向けての要望書にも賛同することになった。
3. 長谷川・永田賞候補者の推薦について
 - ・全運営委員から成る選考委員会で、長谷川・永田賞候補者が選考されたので、会長が次回の評議員会にはかることになった。
4. 山田科学振興財団の応募(3/31締め切り)の学会推薦候補者について
 - ・2件以上の応募希望者があったので、選考方法について審議した結果、会長が評議員や関係者の意見を収集し、学会推薦として2件に絞ることになった。
 - ・所定の推薦書用紙の会長への書類提出締め切りを3月10日とすることになった。
5. JGG誌問題検討について
 - ・平成7年12月25日に非公式折衝で話合われた「合同欧文誌に向けての作業委員会」での議事についての報告をもとに議論がなされた。また、参加学会の意向も踏まえ、この委員会を第1回作業委員会として正式に認めることにした。
6. 創立50周年記念事業について
 - ・秋の第100回大会において、特別講演、分野毎のポスターレビュー、学会賞や名誉会員の推薦、出版物の企画等をWG(國分会長、笹井、田中、山本、横山委員)で検討する事になった。
7. その他
 - ・H8年度科研費「研究成果公开发表(B)及び(C)」については、夏の会報に掲載。
 - ・日本学術会議のH8年度における学術研究集会等開催予定調査については、追加の集会名等を会長名で再度提出。
 - ・古いJGG誌を購入したいとの問い合わせに対応するために、早急に全学会誌を学会事務センターもしくは大学図書に保存・完備する必要がある。各機関のJGG誌の保存状況を総務に連絡する。
8. 次回運営委員会
 - ・日時:平成8年3月26日(火)17:00-20:00
 - ・場所:大阪大学豊中キャンパス内(詳細は後日連絡)

(総務担当運営委員)

新入会員

秋の総会以降に本学会に入会された方は以下のとおりです。

正会員

高木俊治 (株)三菱総合研究所
総合安全研究センター

正会員(学生)

海老原祐輔 東海大学大学院工学研究科

以上の新入会員の加入により1月31日現在、正会員583名、正会員(学生)79名、海外会員62名、名誉会員3名、賛助会員15社となります。

学会誌編集長推薦委員会報告

現学会誌編集委員会の任期が3月を以て終わるため、上出、本蔵、寺沢、小野、鳥居、横山会員および会長からなる編集委員長推薦委員会を発足させた。1996年1月11日同委員会を開催し、討議の結果、河野現委員長に2年間の任期で委員長を委嘱することとなった。河野現委員長にはこの結論を伝え、委員長として引続き重責を果たしていただくこととなった。

(編集委員長推薦委員会)

第1回 合同欧文誌に向けての作業委員会 議事録

日時:1995年12月25日 13:30-17:30

場所:東京工業大学石川台2号館315

出席者:小野(S)、川勝(震)、小屋口(火)、田近(惑)、比屋根(惑)、福西(S)、本蔵(S)、横山(S)

欠席者:菊地(震)、末広(震)、巽(火)、山本(S)

[()内は代表する学会。震:日本地震学会;火:日本火山学会;惑:日本惑星科学会;S:SGEPSS]

1. 各委員の自己紹介、各学会の事情、合同欧文誌問題に関する認識について紹介された後、世話役に本蔵委員、書記に横山委員が選出された。

2. 事前の非公式折衝で話し合われた点を中心として本蔵委員より現在までの経過説明が行われた。これに対し、質問、意見交換の後、以下の点を前提とすることが了承された。

(1) わが国からの独自の情報発信元として一流の国際誌を持つ必要があることを合同誌の理念とする。

(2) 合同誌のスコープとしては地球惑星科学関連学会の範囲を念頭に置き、名前についても例えば、Journal of Earth and Planetary Science のような包括的なものを考える。

(3) 配布形式は最終的には購読性を指す。

(4) 合同誌は JPE と JGG を引き継ぐものとし、ボリュームナンバーもこれを考慮する。

(5) 本委員会の構成のための呼びかけ範囲は現時点では JPE 及び JGG 関連学会のみとする(即ち日本火山学会、日本地震学会、日本測地学会、日本惑星科学会、SGEPSSの5学会)。現在、日本測地学会からはメ切をすぎても呼びかけに対する返事が来ないため、残る4学会で委員会を構成する。ただし、将来的には呼びかけ範囲を広げることを検討する。また、呼びかけの範囲と雑誌の内容とは基本的には関係しない。

(6) 地球惑星科学関連連合学会をつくり、これを雑誌

の財政基盤にするという考えも会員の中にはあるが、ここでは雑誌の問題と学会連合の問題は切り離し、現在の学会体制の中で財政基盤を確立する方法を考える。

(7) 合同欧文誌に向けての作業委員会は関連学会で合同誌を発足させる場合の基礎となる実行案の作成をするための作業委員会であり、実行案作成のために前向きな姿勢で検討を行う。作成された実行案は各学会でそれぞれに検討され、その後、合意が得られれば合同誌発足に向けての具体的な作業が開始されるものと考えられる。

3. 雑誌の名称について例えば、Journal of Earth and Planetary Science という science を含んだ名前の案が出されているが、science と geophysics のどちらが望ましいか、またどのような名称が好ましいかについて次のような意見交換がなされた。

(1) geophysics は本来、広範囲の分野を含んでいる。

(2) 各学会共 geophysics でも大多数には受け入れられると推測できる。

(3) planet を名前に入れたいとの案もある。

(4) 名前と内容は必ずしも一対一に対応する必要はない。

(5) geophysics はヨーロッパで多く使われているので使わない方がよい。

(6) geophysics を使うとするとどの様な名前が考えられるか?

(7) geophysics でも science でもどちらでもよい。討論の結果、雑誌の名称については引き続き適当なものがあるかどうかを検討することとなった。

4. 雑誌の内容について意見交換がなされ、以下のようなコンセンサスを得た。

(1) 雑誌の基本姿勢としては境界領域も含んだ幅

広い範囲を扱う。ただし、内容はある程度編集側でコントロールできるようにしておく。

(2) 雑誌の特徴は以下の3点で出す。

(a) 地球惑星関連の唯一の総合雑誌：日本で初めてであり、これ一冊を見れば日本の地球惑星関連科学の事情がわかるようになる。

(b) News 及び review articles を含む：外国から見て論文以前の段階での日本の動きが良く解るようなり(例えば、プロジェクトの開始等)、情報の発信元としての役割を果たすことができる。

(c) レターを重視する：例えばレターは6ページまでとし、レビュープロセスを速くして量と共に質の高いレターが集まるようにする。

(3) フォーマットはA4サイズ、2段組みとする。ページ数についてはさらに検討する。

(4) 投稿は会員、非会員の区別なく自由である。

5. 雑誌の財政基盤について以下のような意見が交換された。

(1) 財政の基盤は学会に置くべきである。商業誌ではつぶれる可能性がある。

(2) 以前合同学会で行ったアンケートでは12000円を越える雑誌では購読しないとの意見が多く、購読制をとるなら12000円以下である必要がある。従って、この値段以下に押さえるためには何らかの補助金が必要である。

(3) 最終的には学会からの補助はやめる方向へ進めたいが、当面は、購読料、学会外からの補助金、学

会からの補助金の3つが必要である。

(4) 学会から補助を出すのは結局会員がお金を払うことと等しく、購読料が高いこととあまり変わらない。

(5) 現在学会からの補助金支出が可能なのは、日本地震学会(現在 JPE に約200万円の補助)と SGEPPS (現在 JGG に約200万円の補助)のみである(因みに、JPEは購読制であり、JGGは SGEPPS の会員には無料で配付している)。

(6) 全員強制購読という手段も考えられるが、無理な学会もある。また、筋としてもおかしい。呼びかけや説明の仕方がよければ購読する会員は増える。

(7) 複数の援助者を探すことも可能。

(8) 赤字になっても複数の学会が責任を持って買い支えるという保証が必要である。

討論の結果、財政基盤については今後随時意見を交換していき、本格的な検討は雑誌の内容や編集体制の案がまとまった後に行なうこととなった。ただし、合同欧文誌成立のためには何らかの補助金(約800万円)を最低限必要とすることの共通認識を得た。

6. 本委員会の議事録は公開される。

7. 1996年春の合同学会までに後2回の会議を開き、各学会の春の総会で会員の意思を問えるように、合同誌の内容、編集体制、財政等についての草案がある程度まとめる予定である。次回は1996年2月8日に委員会を開催し、編集体制及び財政、出版社などについて話し合う予定である。

(雑誌担当運営委員)

国際学術交流事業補助金受領者の報告

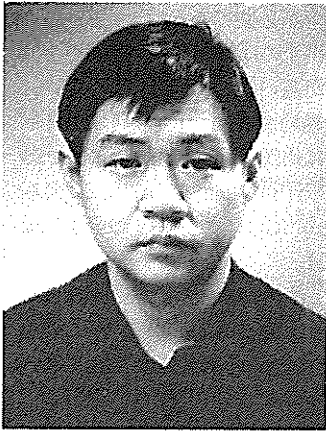
●阿部 琢美

青山学院大学

M教授の発表は彼独特の思想に満ち溢れ、かつ哲学的要素を含んでいた事が頗る印象的であった。発表内容自体については特に新しい観測的な発見や理論的知見が盛り込まれている訳では無いが、概二十分の発表には彼自身の研究テーマである電離層下部のプラズマ擾乱に対する科学的な視点だけではなく、哲学的な思想と受け取れるものが絶えず背景に感じられた。更にそれは電離層に対する今時の様々な現象的理解を通じて総括しようとする試みにおいては、同じく電離層を研究テーマに持つ我々にとって頗る辛辣であったが、より強く印象に残ったのは発表の背後に脈々と流れる思想的背景であった。

私は学会の海外学術交流基金の補助を得て、1995 Cambridge Symposium/Workshopに参加していた。昨今は国際的学術会議の国内での開催が以前に比して増加の傾向にあるから、海外出張旅費を調達出来ない若手研究者にとっても状況は改善されつつある。それにも拘わらず、補助金を得て態々高い航空運賃を払って海外での会議に参加するのだから、国内の会議では得る事の出来ない何かを見つけて来ようと思っていた。こう意気込んでいた私にとってM教授の発表は頗る刺激的かつ新鮮であったのである。

彼のみならず所謂西洋人の学会発表に接して感ずる事は、彼らにとって学会講演は科学的な発見知見を披露する場であると同時に、研究に対して彼ら自身が取り組む姿勢(極言すれば彼らの生き方)を表現する機会だと言う事である。我々は特定の研究テーマを選択するに当たり各自が所有する価値観を基に動機付けを行うが、



夫々の価値観が千差万別であるのと同様に、選択されたテーマが個々の研究者により異なるのは当然である。M教授の発表からは「他人が何と言おうと俺はこの問題に価値を見出し、俺の流儀で研究を進めるのだ」という自信と誇りに満ちた信念が感じ

られた。勿論、欧米人の発表が全てそうした雰囲気醸し出す訳では決して無いが、この種の思想を彼らの発表に見出す事はこの他にも間間あったし、日本国内での学会に於いてはこうした印象を発表者から受ける事は極めて稀だから、この点は学会発表に対する彼我の認識の相違(たとえ無意識の中で行われるとしても)といっても良いであろう。

自分自身が研究に対して取り組む姿勢を示すと言う事は換言すれば、研究において自身の価値をどう実現するか、と云って良いと思うが、こうした方向は科学研究に必要な客観性とは裏腹に利己主義的方向へと向かうようにも思われる。日本語の私に対応するギリシャ語のegoは独立的自我を意味するが、真実よりも利合を重んじる我々日本人と異なり、絶対善の唯一神を戴く西欧人は自分の信ずる真理をあくまで押し通そうという強靱な信念を持っている。コペルニクスやガリレオは神の言葉である聖書の記述を疑い宗教裁判で裁かれたが、絶対者たる神の権威を徹底的に疑い、非寛容な神に対して聖書の言葉であろうと間違いは否定せねばならぬ、との誇りに満ちた信念に基づいた彼らの合理主義精神によって、真理が究められ近代科学の発展が産まれたのではないか。コペルニクスやガリレオに限らず絶対者たる神と対決した西欧の科学者哲学者は枚挙に暇が無いが、今回のシンポジウムに参加して、M教授の発表から西欧特有の強靱な合理主義精神を感じ取ったのは望外の喜びであった。

肝心のシンポジウムに関する内容は其方退けで多少主観に偏った手柄について述べてしまったが、補助金泥棒と罵られては困るから、参加したシンポジウムについて簡単に紹介する事とする。私が参加した会議の正式名称は1995 Cambridge Symposium/Workshop (Multiscale Phenomena in Space Plasmas)で、本来マサチューセッツ工科大学が主催して二年毎にまだ残暑の残る九月初旬にボストン市内で開催されるのが恒例で

あったが、今年はより多数の参加者を見込んで東海岸から飛行機で二時間ほどの英領バミュダ島で開かれたのであった。会期は二月二十日から二十五日迄の六日間、百件を超す招待講演は口頭で、三十件程の一般講演がポスター形式で発表が行われた。私の発表が組み込まれたセッションは電離圏磁気圏プラズマのoutflow, drift, transport等に関するものであったが、顔触れから判断して自分以外は大方理論的な内容となるだろうとの予想から、衛星観測データを示し既存の理論と一致する点、相違のある点を夫々強調し、現在我々が所有するデータにおいて何が問題なのか、を主張する事を心掛けた。

今回の私の発表の主題であるpolar windに関しては、60年代に遡る流体モデルに始まる初期的理論以来の長い歴史にも拘わらず、本格的観測データの不足に因り現象的検証が未だ不十分である、との認識を私はもっている。特にイオン加速のメカニズムにとって本質的なのは極域の開いた磁力線方向のプラズマの圧力勾配とそれに基づいた偏極電場というのが通説になっているが、あけぼの衛星の直接観測による結果はこうしたモデルのみでは説明不可能なイオンの流速分布を提示しており、加速を助長する為の更なる機構の提案が必要な事を物語っている。これら二つを重点的に、特に理論家の方々に問題を提起し関心を惹くよう心掛けて二十分間の発表を行った。拙い英語で内容をどの程度理解して貰えたのか不安ではあったが、発表後は当初の思惑通り理論家の方からの反響があって、polar windの流速分布が示す著しい昼夜非対称性に関する理論的側面からの提案、あるいは新しい観測データをシミュレーションに取り入れた等のリクエストがあった事に、自分の発表に対して手応えがあったものと感ずる事が出来た。

今回のシンポジウムに参加して、自分の研究成果を発表出来た事は勿論、他者からの多くの助言やコメントを通して自分自身の研究の方向に関する指針を得て、専門分野における自分に課せられた役割を認識出来た事は大きな収穫であった。だが、自分にとってより大きな衝撃だったのは彼らが講演発表において見せた哲学的な態度から感じられた思想的背景、即ち研究には、終始一貫したと言う意味に加えて外部による多少の批判なんぞには微動だにしない、筋の通った堅固な思想が必要である、という彼らの信念であり、自分の今後の研究に対する姿勢を考える上で大いに参考になった。

最後となったが、日本国内では得られない貴重な経験が出来たのも本海外学術交流基金のお陰である。ここに深甚の謝意を表す。今後も若手研究者が本制度を活用し国際学会に意欲的に参加して、海外の研究者から多くの事を学ぶよう強く希望する。

地球物理学研究連絡委員会議事抄録

(第16期第3回)

日時 平成7年9月25日(月) 13時30分～16時30分

会場 日本学術会議第7部会議室(6階)

出席者 浅井、上田、大家、瀬川、高橋、竹内、藤井の7委員、尾池(オブザーバー)、金井(日本学術会議事務局)

議事：上田地物研連委員長の司会により議事が進められた。

(1) 諸報告

● 測地学審議会報告

上田委員長より次の通り報告された。

昨年以來、測地審で検討中であった課題「地球科学における重点的課題とその推進について」の建議が予定より遅れていたが、本年6月内閣総理大臣ほか、諸大臣に対して建議された。この建議の主眼は、システムとしての地球をさらに強調する点にあった。内容的には、海洋科学がやや弱い観がある。特に、海洋物理学にかかわる研究に対する表現が弱く、今後、見直す必要があるかもしれない。

コメント：

竹内 今回の建議では、陸水学関連も大変に弱いと思われる。測地審の気象水象部会からでたテーマが全く取り上げられていないのは何故であるか。
瀬川 海洋物理学は、現在大きな国際プロジェクトが動いている反面、将来像が良く見えてこないために、この建議では取り上げにくいのだという意見を聞いたことがある。

● 阪神・淡路大震災調査特別委員会報告

尾池オブザーバーより次のように報告された。

標記特別委員会は、今日までに6回開催された。近く、中間報告書を出す予定。この中に、特に2つの要望が強く出されている。1つは、地震の強震観測の整備である。もう1つは、災害医療体制の整備である。

強震観測について特に強調されたことは、岩盤に直接地震計を設置するように努める、地下も含めて3次元アレイを考える、データのスムーズな流通を図るなどである。データ流通については、阪神大震災の強震データが未だ公開されていないなど、問題が多い。大学でも、強震計による移動観測班を用意すべきであろう。医療体制では、移動医療班の結成(医療船など)が提案された。この問題については、次回の日本学術会議総会の議題とする予定である。

● 科学研究費「時限付き分科細目」について

浅井委員より次のように報告された。

平成9年度からスタートする新たな文部省科学研究費一般研究Cの時限付き分科細目として、第4部会

では「自然史科学」を採用した。毎年、学術会議が推薦し提案している新テーマは、今まで一度も採択されたことはないと聞いている。しかし、学術会議としては、これに挫けず、今後も積極的に新しいテーマを提案すべきであるという意見が強い。

● ILP 国際ワークショップ

上田委員長より次の報告があった。

本年9月18日から20日にかけて開催された日本学術会議国際学術協力事業研連(DELP専門委員会)主催の国際リソスフェア計画(ILP)国際ワークショップは、大変に有意義な成果を残し、つつがなく終了した。

● 第21回 IUGG 総会報告

上田委員長より次の通り報告があった。

IUGGは新たな参加国として台北(台湾)を認めた。ユーゴスラビアについては、国内情勢、国際情勢がまだまだ混乱を極めているので、IUGGとしては、国際連合の動向を見極めてから、取扱いを決定することにした。IUGGの新しい総裁は、米国のWyllie教授、副総裁はイスラエルのShamir教授、総幹事はフランスのBalmino博士、Bureau Memberは日本の上田教授、ロシアのMonin教授、および中国のChen教授であった。

IUGG 日本の新役員(任期1995～1999)

IUGG Bureau Member	上田誠也
IAGA 会長	河野 長
同 コミッション副会長	深尾昌一郎
IAPSO 副会長	鳥羽良明
IAHS 副会長	竹内邦良
同 コミッション副会長	水山高久
同 コミッション副会長	谷 誠
IAG コミッション会長	田中寅夫
ILP Bureau Member	加藤照之

なお、いまだ掲載漏れがあると思われるので、調査の上、次回の議事録に載せることとした。

(2) IUGG 2003年の日本開催について

地物研連としては、この件については基本的に賛成であり、やるとしたならばそのスタートは早いほうが良いと言う意見であった。開催資金としては、当然、億の単位のお金が必要であり、又、日本では特に、会議場の選択が難しいと思われる。早急にFeasibility Study Groupを作り検討すべきである。今後、上田委員長がこのグループ(IUGG検討委員会(仮称))づくりのために、何人かの人と個別に相談することとした。また、地物研連関連研連においてもこのことを検討する必要があるので、各委員は、関連研連に持ち帰って検討することとした。

(3) 宇宙空間科学コスパー総会について

宇宙空間研究連絡委員会委員長およびCOSPAR副委員長である西田篤弘氏より、平成7年9月8日付けで、地物研連に対し次の依頼があった。「宇宙空間研究連絡委員会では、第32回宇宙空間科学コッパ総会を1998年7月に名古屋で開催するにつき、日本学術会議にその共催を申請している。このため貴研連に対して、ご支持をお願いすると共に、もし、賛同して頂けるならば、日本学術会議に対して副申IIを提出していただきたい。」

この事について、種々論議のすえ、副申IIを日本学術会議に提出することに同意することとした。

(4) 研究体制の在り方について—特にネットワークとデータ保存の問題—

この事につき、種々論議を行った。

コメント: 大家 例えば、宇宙科学研究体制についてみると、大学、及び共同利用研究所の間での有機的機関ネットワークを確立することの方がより新しい行き方ではないだろうか。

次回 地物研連(第16期第4回)

日時 平成7年12月25日(月)

13時30分～16時30分

会場 日本学術会議

(本歳義守会員より)

来年度の総会並びに講演会の予定について

第100回総会並びに講演会は平成8年10月21日(月)～24日(木)の会期で、郵政省通信総合研究所などで開かれる予定です。

また、平成9年(1997年)の合同大会は、名古屋大学のほうで引き受けて頂けることに決まりました。現時点で、予定されている開催期間と会場は、以下の通りです。

期間: 平成9年3月25日(火)～28日(金)

会場: 名古屋大学(旧教養部)

大会委員長・大会実行委員長等の役員は、まだ未決定ですが、4月までにすべてのLOC役員を決定し、合同大会実行委員会をスタートさせる予定のことです。

正式にLOCがスタートするまでの連絡係は、地球物理学教室の小川克郎教授

電話 052-789-3028 (ダイヤルイン)

Fax 052-789-3033

です。

なお、平成10年以降の合同大会は、北海道大学、東京大学(順は未定)で、開催を引き受けて頂ける見通しです。

大林奨励賞メダルのデザイン公募のお知らせ

大林奨励賞推薦作業委員会

平成7年度より本学会の若手会員の研究を奨励する「大林奨励賞」が制定されました。現在平成7年度の授賞候補者の推薦の作業が進められており、会長への推薦、評議員会での議決を経て、秋期総会において第1回の表彰が行われる運びになっております。

つきましては、この新たに設けられました「大林奨励賞」で授与されます「メダル」のデザイン案を広く会員の皆様から募りたく、公募いたします。ふるってご応募お願いいたします。

応募締切日 平成8年4月10日

応募先 〒980-77 仙台市青葉区荒巻青葉

東北大学理学部 森岡 昭

Tel 022-217-6735 Fax 022-217-6406

e-mail morioka@stpp.geophys.tohou.ac.jp

第2回大気化学討論会のお知らせ

1994年9月に第8回CACGP/第2回IGAC国際シンポジウムが富士吉田で開催されたのがきっかけで、この大気化学討論会が発足しました。本討論会は、各所属学会で大気化学を中心に研究発表されている、あるいは興味を持たれている方々が集い、最新の研究成果やお互いの情報交換、今後の研究計画案などを忌憚なく話し合うことを目的としています。今回は議論や周辺分野の情報をより充実させるため、広く気象、物理、モデリング関係の研究者の方々にも参加いただき、2泊3日、時間無制限の討論会にしたいと計画しています。北海道の6月は花咲乱れる新緑の頃、宿泊施設にも限りがありますので、早めにお申し込み下さい。

記

日時: 1996年6月6日(木)～8日(土)

会場: 札幌市南区定山溪温泉西2丁目5番地

札幌市職員共済組合定山溪保養所「溪流荘」

Tel. 011-598-2721

発表申込締切: 1996年3月25日(月)

参加費: 20,000円(宿泊費、食事、懇親会費、プログラム集代を含む)

申込方法: A4用紙を用い、A5横(縦11cm×横16cm)一枚のサイズ内に講演題目、所属、氏名(発表者の前に○)、発表の概要を記入し、余白に申込者氏名、連絡先(住所、tel、fax、e-mail)を下記宛にお送り下さい。お送りいただいた原稿はそのまま当日、プログラム集として印刷しお配りします。または電子メールでお送りいただいても結構です。ただし、編集はこちらにおまかせ願います。

申込先: 〒005 札幌市南区南沢5条1-1-1

北海道東海大学工学部海洋開発工学科植松光夫

tel. 011-571-5111 (内線614) fax. 011-571-7879

e-mail uematsu@dm.htokai.ac.jp

学会創立当時の思い出

福島 直

1947年5月に本学会の創立総会と第一回講演会が東京大学医学部講堂で開催された時、私はまだ学部学生でした。その頃すでに永田先生の鞆持ちで毎月電離層研究委員会に出席して雑用を仰せつかっていましたので、東京における本学会の諸用務もさぞや多く受け持たされていたのではなかろうかと想像される方々も多いかと思いますが、当の永田先生からは「君を学会の用務には使わない」とはっきり言われていました（しかしその裏には「電離層委員会の用務に全力を尽くせ」との意味が隠されていたのでしょう）。このような次第で、当時は学会の開催準備をされた方々のご好意に甘えて会期中を楽しく過ごさせてもらいました。ただし勿論のこと、自分が申し込んだ講演を果たす準備のために毎度つらい思いをしていました。

創立当初の学会総会では毎度故長谷川万吉先生が委員長挨拶と題して約1時間にわたり、地球電磁気学関係の内外情勢報告、学会の果たすべき役割、会員への期待などを穏やかではあるが情熱をこめてお話しされておられたことに私は毎度深い感銘を受けました。いま考えてみますと、その頃は大学在職者の会員で海外留学の経験を持っておられた方は長谷川先生ただお一人でしたから、内外情勢を綿密に分析した上で後輩会員たちに適切な激励の言葉を総会席上で壇上から語りかけられた挨拶は、ご自身の留学時および戦前戦中の諸経験に基づいて周到に準備されたものであろうと思っています。

地球物理学の国際組織 I U G G は第一次世界大戦直後に設立され、その第7回総会は1939年9月に米国のワシントン市で開催されている。折しも第二次大戦が勃発したので、この総会では役員交代などの協議事項を棚上げにし、科学的成果の発表と討論は予定通り行い、後年平和が再び訪れた時に第8回総会をノルウェーのオスロで開催することを申し合わせた後、出席者は急遽帰国の途に就いている。戦後になって I U G G 第8回総会が1948年8月に開かれた時には日本は招待されませんでした。論文抄約を提出することだけは許可されましたので、当時本学会で発表されていた研究成果も数編提出されました。

こうして日本国内であげられた研究成果を海外で紹介できる機会が訪れたことが契機となって、当学会でも電離層研究委員会でも研究成果を英文で発表



する出版物を刊行する計画を推進するようになりました。この両組織とも季刊英文研究報告誌の出版を企画実行しましたが、その底流には「研究者たるものは年に2編以上の論文を発表しなければならぬ」という不文律（その根拠は不明ですが、当時よく聞かれた句）があり、二三十名程度の研究者を抱えていれば季刊誌の編集に必要な論分数を確保できる筈であるという目算（と組織構成員に対する期待）があったようです。この単純な計算と現実との不一致がその後両組織の出版事情に少なからぬ影響を及ぼし、両組織の出版物が互いに相補的な出版物として両立するようになったのは25年以上も後のことです。

さて終戦直後に話を戻し、1941年以来入荷が途絶えていた学術雑誌が戦後始めて到着した時の思い出を記します。戦中戦後に発行された *Terrestrial Magnetism and Atmospheric Electricity* 誌バックナンバー約8年分を取り急いで目を通したところ、当時最も私の関心を惹いた論文は Leiv Harang が1946年に書いた論文（後年 Harang discontinuity と呼ばれるようになった現象、すなわち高緯度地域上空で21時前後に東向き及び西向き極光帯電流が共存する事実を指摘した論文）であった。大戦中ノルウェーのトロムゼーからドイツ軍当局によってベルリンに連行されていた同教授は、収容所の中でこの論文の草稿を作っていた由である。便利な文献複写装置がなかった当時、図書閲覧室で必要箇所をノートに書き写していた経験は、後に自分が英語で論文を書くときに大いに役立ったと今でも思っています。

人事公募

●九州大学理学部地球惑星科学科教授公募

職種人員：教授1名

担当講座：地殻構造科学講座

専門分野：地球内部物理学、特にマントルレオロジー地球熱学、地球電磁流体力学に関する教育・研究指導ができる方

着任時期：決定後出来るだけ早い時期

提出書類：○履歴書○これまでの研究概要(A4紙2枚以内)○業績目録○主要論文別刷3編○着任後の研究教育の抱負(A4紙2枚以内)○意見を聞ける人2名(応募者との関係)

応募締切：平成8年2月29日(木)

書類送付先及び問い合わせ先：812-81 福岡市東区箱崎6-10-1 九州大学理学部地球惑星科学科地殻構造科学講座教授選考委員会高岡宣雄。電話092-641-1011内線4343、Fax 092-632-2736

書類はA4紙を使用し、封筒に応募書類在中と朱書きの上簡易書留で郵送のこと

●東京大学地震研究所

公募人員：助教授 1名

所属：採用後、地震予知研究推進センター、または他の適当な部門・センターへ所属していただきます。

研究分野：地殻に関する電磁気学的研究(地震予知、火山噴火予知研究を含む)。この分野に、新しいアプローチをもって臨もうとする意欲のある人を、歓迎します。

採用予定時期：決定次第できるだけ早い時期

応募資格：博士の学位を有する者

提出書類：○履歴書(市販用紙可)○業績リスト(主要論文の別刷り5編程度添付)○研究業績の概要(1000字程度)○研究計画書(1000字程度)○推薦書。または応募者について意見を伺える人、2名以上の氏名および所属を記載した書類

公募締切：1996年3月15日(金) 必着

問い合わせ先：東京大学地震研究所

火山噴火予知研究推進センター 井田喜明

TEL:5689-8091 FAX: (03)3812-6979

E-mail: ida@newsida.eri.u-tokyo.ac.jp

応募書類提出：封書を用い、表に「助教授応募書類在中」と朱書き、書留郵便で東京大学地震研究所人事掛(〒113 東京都文京区弥生1-1-1)に送付して下さい。

●名古屋大学太陽地球環境研究所教官公募

公募人員：教授・助教授または2名

所属部門：電磁気圏環境部門

研究分野：現在当研究部門では、EISCATレーダー等

による地上観測、人工衛星利用、等の手法により電離圏・磁気圏環境の研究を行っております。今回の公募では、それらを広く発展させ、この研究分野において先導的な役割を果たしていただける方で、かつ、大学院等の教育にも熱意をもち、全国共同利用研究所としての当研究所の任務を十分理解して共同利用の促進に積極的に取り組んで下さる方を希望します。

着任時期：平成8年8月1日(月)

提出書類：○履歴書○研究歴○業績リスト○主要論文別刷○研究計画書及び自薦の場合は本人について意見を述べられる方2人の氏名と連絡先を記した書面、他薦の場合は2人の方からの推薦書(応募対象の職名を明記して下さい。)

公募締切：平成8年3月29日(金)

選考：名古屋大学太陽地球環境研究所人事選考委員会の選考に基づき、同運営協議会の意見を求めて、同研究所の教授会が決定します。なお、適任者がいない場合は決定を保留します。

宛先、問い合わせ先：

〒442 愛知県豊川市穂ノ原3-13

名古屋大学太陽地球環境研究所 所長 國分 征

電話：05338-9-5182 Fax：05338-9-5090

E-mail: kokubun@stelab.nagoya-u.ac.jp

当該部門の状況等についての問い合わせ先：

電磁気圏環境部門教授 小川 忠彦

電話：05338-9-5164 Fax：05338-9-1539

E-mail: ogawa@stelab.nagoya-u.ac.jp

研究助成金案内

●山田科学振興財団(1996年度)

推薦希望のメ切1996年3月10日

自然科学の基礎的研究に対して補助、実用指向研究は対象外。援助額は1件あたり200万から500万円、総額4,000万円、援助総件数は10件程度。学会からの推薦及び財団関係者からの個人推薦の中から選考。用途は給与以外は自由。使用機関は2年間。推薦枠2件以内。

連絡先

財団法人山田科学振興財団

〒544 大阪市生野区巽西1丁目8番1号

06-757-3311(代表)

推薦ご希望の方は3月10日までに総務まで申請書をご送付ください。申請書について詳しいことは総務まで。

SGEPSS Calendar

1996年

- 3月26日～29日 地球惑星科学関連学会合同大会 於 大阪大学豊中学舎
- 4月15日～19日 COSPAR Colloquim for Magnetospheric Research using Advanced Technique
at Beijing, China
- 5月13日～17日 International Conference on Substorms-3 at Versailles, France
- 5月20日～24日 AGU Spring Meeting at Baltimore, USA
- 7月8日～11日 MT Data International Workshop at Geological Survey of Japan, Tsukuba
- 7月12日～18日 13th Workshop on Electromagnetic Induction in the Earth
at Onuma International Seminar House, Hokkaido
- 7月14日～25日 COSPAR Scientific Assembly at Birmingham, UK
- 7月23日～27日 WPGM (Western Pacific Geophysics Meeting)
and SEDI (Study of the Earth's Deep Interior)
at Brisbane Convention and Exhibition Centre Brisbane, Australia
- 8月4日～14日 International Geological Congress at Beijing, China
- 8月11日～15日 AGU Chapman Conference on Coronal Mass Ejection: Causes and Consequences
at Bozeman, Montana, USA
- 8月28日～9月5日 URSI General Assembly at Lille, France
- 9月9日～11日 International Workshop on Planetary Radio Emissions V at Granz, Austria.
- 10月21日～24日 地球電磁気・地球惑星圏学会第100回総会並びに講演会
於 郵政省通信総合研究所ほか
- 11月 AGU Chapman Conference on Shallow Level Processes in Ocean Island Magnetism:
Distinguishing Mantle and Crustal Signatures
- 11月5日～9日 AGU Chapman Conference on the Earth's Magnetotail: New Perspective
於 石川県教育会館
- 12月15日～19日 AGU Fall Meeting at San Francisco, USA
- 1997年
- 3月25日～28日 地球惑星科学関連学会合同大会 於 名古屋大学 (旧教養部)

SGEPSSカレンダーは会員からのお知らせで成り立っております。国内外の学会、研究会、委員会、予稿締切等、皆様に広めるべきことがございましたら会報担当までお知らせください。

地球電磁気・地球惑星圏学会

会長 國分 征

〒442 豊川市穂ノ原3-13 名古屋大学太陽地球環境研究所 05338-9-5182 Fax 4-8806

総務 湯元清文

〒812-81 福岡市東区箱崎6-10-1 九州大学理学部地球惑星科学科

092-641-1101 ex. 4157 Fax 643-1196 email yumoto@geo.kyushu-u.ac.jp

庶務 渋谷秀敏 (会報担当)・森岡 昭

〒593 堺市学園町1-1 大阪府立大学総合科学部地学教室

0722-52-1161 ex 3735 Fax 55-2981 e-mail shibuya@cias.osakafu-u.ac.jp

運営委員会 〒113 東京都文京区本駒込5丁目16番9号学会センター-C21(財)日本学会事務センター 気付

03-5814-5810 会員業務 (入退会、住所変更等、会費、会誌)

03-5814-5801 学会業務 (庶務、窓口、渉外)

03-5814-5820 ファクシミリ

入会申し込みは運営委員会宛、研究助成金案内は総務宛、会報への投稿は担当庶務宛ご連絡ください。
会報へのご提案、ご意見、情報提供、寄稿をお待ちしています。

高度研究体制の早期確立についての要望が採択さる

平成7年11月 日本学術会議広報委員会

今回の日本学術会議だよりでは、10月に開催された日本学術会議第122回総会の概要と、総会初日に採択された「高度研究体制の早期確立について（要望）」の内容を紹介します。

日本学術会議第122回総会は、平成7年10月25日（水）から3日間にわたって開催されました。

総会初日は、まず、報告が行われ、会長経過報告及び科学技術会議報告に続き各運審附置委員会、各部、複合領域研究連絡委員会運営協議会、各常置委員会及び各特別委員会の報告がそれぞれの委員長・部長等から行われました。

この中で、利谷広報委員会委員長から、①日本学術会議月報の充実に伴い、会員各位からの原稿執筆の協力要請、②平成8年度の公開講演会の企画の募集を2月連合部会時に行うので、会員各位への事前検討要請、③日学選書の出版件数の拡大のための企画募集、④前日に開催した広報委員と地区会議代表幹事との連絡会議の議事から、地区会議の抱える問題点の紹介、の4点について付言がありました。

また、第7常置委員会、学術と産業特別委員会及び阪神・淡路大震災調査特別委員会からは、それぞれ、総会報告に付して、①国際対応の目的や役割をまとめ、それに対する日本学術会議内外からの意見を集約することで、日本学術会議としての国際対応の立場の構築をめざしてまとめられた「日本学術会議と国際対応（仮題）」、②学術の新たな進むべき方向に指標を与え、より高度な産業への貢献の方向を定めるのに必要な価値判断の基準を与えることの第一歩を踏み出すための端緒となるべくまとめられた「歴史的転換期における学術と産業のかかわりについて」、③事態の緊急性にかんがみ、意見のまとまったものから順次これを報告したいとの趣旨から「強震観測網の充実と強震研究体制の整備について」と「災害医療体制の整備について」の2件についてをその第一段階として位置付けてまとめられた「阪神・淡路大震災調査特別委員会第一次報告」が会員に配布されました。

この後、会員推薦管理会報告及び各研究連絡委員会報告に続いて、アジア学術会議実行委員長報告があり、西島委員長から、明年3月に開催予定の第3回アジア学術会議を中心とした今後の進め方について発言があ

りました。

続いて、提案事項の説明・討論・採決に入り、「内科系科学」と「外科系科学」に分かれている第7部の専門を見直して統合すること及び第17期に向けて、研究連絡委員会を見直し、改廃、統合、名称変更を行うことを内容とした①「日本学術会議法施行令」の一部を改正する手続きを進めること、②「日本学術会議会則」の別表の一部改正、③「日本学術会議の推薦に係る研究連絡委員会の指定等に関する規則」の別表の一部改正、④複数の研究連絡委員会にまたがる専門委員会の設置を認めることを内容とした「日本学術会議の運営の細則に関する内規」の一部改正、⑤会員推薦管理会が学術研究団体の登録を審査するに際して、資料を得る必要があると認められる場合には、日本学術会議の意見を聴取できるようにするための「学術研究団体の登録に関する規則」の一部改正、⑥今後における日本学術会議の組織、機能、施設等のあり方について、中・長期的観点から検討することを任務とした「運営審議会附置将来計画委員会」の設置についてを、それぞれ賛成多数で可決しました。

さらに、⑦21世紀を目前に控え、我が国の学術研究の飛躍的発展を図る観点から、研究費、研究者及び研究機構について抜本的な改善充実を図り、我が国の学術研究体制を一挙に高度の水準に引き上げ、高度研究体制の早期確立の実現を目指した「高度研究体制の早期確立について（要望）」を賛成多数で採択しました。

引き続き、⑧「脳の科学とこころの問題」を脳科学の視点からまとめた脳の科学とこころの問題特別委員会の対外報告案について討議を行いました。会員から活発な意見が出されたため、審議を2日目に持ち越して検討した結果、運営審議会で一部修正を行うことを条件として、賛成多数で対外報告とすることを了承しました。

2日目の最後に、前日配布された第7常置委員会の「日本学術会議と国際対応（仮題）」に基づき会員の間で自由討議が行われ、活発な意見交換がありました。

伊藤会長が村山総理に要望書を手交

平成7年10月30日(月)の午後3時に伊藤会長及び利谷、西島両副会長が内閣総理大臣官邸に村山総理大臣を訪ね、総理府の担当大臣である野坂内閣官房長官の立会いの下、平成7年10月25日(水)の第122回日本学術会議総会で採択された「高度研究体制の早期確立について」の要望書を手渡し、その趣旨等について説明を交えながら、懇談を行いました。

村山総理は、「要望の趣旨については、大変よく理

解でき、貴重なご意見を賜ったものと思う。しかし、例えば、研究費の倍増についての要望などは、シーリングの枠もあり、容易ではない。補正予算で配慮したりして、政府もいろいろ努力はしている。今後とも期待に沿うよう努力する。」と語り、要望書について理解を示しました。

なお、要望書の内容は以下のとおりです。

高度研究体制の早期確立について (要望)

学術研究が我が国はもちろん、世界全体にとってもその将来を左右する重要な役割を担うという認識が政・官・産を通じて最近とみに高まってきたことは喜ばしいことである。しかしその一方、我が国の学術研究体制にはなお制度的、構造的な多くの問題が顕在化している。

日本学術会議では、平成元年4月20日付け「大学等における学術研究の推進について—研究設備等の高度化に関する緊急提言—」の勧告を提出し、政府関係機関においても、このような現状を踏まえ、学術研究体制の改善のための様々な施策が講じられている。しかしなお、21世紀を目前に控え、我が国の学術研究の飛躍的發展を図る観点から、研究費、研究者及び研究機構について抜本的な改善充実を図り、我が国の学術研究体制を一挙に高度の水準に引き上げ、高度研究体制を早期に確立することが不可欠である。科学者の代表機関として、日本学術会議は以下の点を早急に実現することを要望する。

1. 研究費について

我が国の研究費の政府による負担割合、政府負担研究費の対GNP比を欧米先進諸国並みに引き上げ、政府の研究開発投資額を早期に倍増させることが必要である。

その際、基礎研究、応用開発研究に加えて、将来における応用の潜在力に注目した「戦略研究」のそれぞれについて助成を強化するとともに、国費による投資的経費としての研究費の支出、民間の研究助成財団の活動の促進などにより、多角的な研究資金源を確保することが必要である。

2. 研究者について

優秀な研究者を確保する観点から、研究費、研究施設等について劣悪な状況にある研究環境を早急に改善することが必要である。

また、ポストドクトラルフェローシップの飛躍的拡充など研究者の雇用形態の多様化を図るとともに、若手研究者の支援施策の改善充実、公正で多角的な評価システムの確立、外国人研究者の任用も含めた研究者の国際的な交流の促進などにより、研究者がその研究能力を最大限に発揮する条件を整えることが必要である。

3. 研究機構について

大学、研究所(国公立試験研究機関、民営研究機関、大学共同利用機関及び大学の附置研究所をいう。)、企業の3セクターの調和のとれた発展、規模的に不十分な研究所セクターの拡充を図るとともに、これらの間の人的交流や研究協力を促進することが必要である。

また、急速に進展する学問の最前線に立って常に高い研究活動を維持するため、研究組織に安定性と流動性の二重性を導入するとともに、我が国の学術研究体制の重大な問題となっている研究支援者の不足について、所要の対策を講じる必要がある。

4. 国際的連携について

世界に開かれた共同研究の拠点の整備、研究助成を目的とする基金の設定など、研究者の国際交流、共同研究等の促進のため、所要の措置を講じる必要がある。その際、アジアの一員として、アジア地域に対しては特段の配慮が必要である。

日学双書の刊行案内

日本学術会議主催公開講演会の記録をもとに編集された次の日学双書が刊行されました。

日学双書No.23「歴史的転換期における学術と産業の在り方をめぐって」

【定価】1,000円(消費税込み、送料別途)

※問い合わせ先

財団法人日本学術協力財団 ☎ 03-3403-9788

1996年地球惑星科学関連学会合同大会 日程概要

	3月26日午前	午後	3月27日午前	午後
A	共通セッション 全地球史解説	共通セッション 全地球史解説	共:現在の地震学と 兵庫県南部地震	シ:兵庫県南部地震 後の地震科学
B	シ:火星研究の 現状と将来	シ:海洋底から理解す る地球のダイナミクス	シ:陸上學術 ボーリング	電:惑星磁気圏 ・探査
C	地震 活断層(1)	震:活断層(2)、 地殻変動	共通セッション マグマ	共通セッション マグマ
D	電:電磁圏 (オーロラ)	SGEPSS 電離圏	共通セッション 全地球史解説	SGEPSS 大気圏(力学)
E	震:発震機構・ 震源過程、津波	震:発震機構・ 震源過程、津波	震:計測方式、 岩石破壊	地震 波動、理論
F	火山 九重火山I	火:九重火山II・ 雲仙火山	火:火山学一般・ ポスター口頭説明I	火:伊豆の火山・ ポスター口頭説明II
G	電:磁気圏 (境界層)	SGEPSS 太陽圏	SGEPSS 大気圏(化学)	三:鉱物・ 岩石・資源(1)
H	共:地球・惑星物性研 究からダイナミクスへ	惑星 惑星科学(I)	共:地球惑星物質の 組織とパターン	惑星 惑星科学(II)
I	測地 測地一般	測地 重力	測地 GPS	測:GPS・地殻変動 ポスター口頭説明
J	共:放射性廃棄物の 地層処分	共:地球磁場の起源: 観測と理論の発展	電:磁気圏 (地球近傍)	共:大陸地殻の 深部構造と進化, II
Poster	16:30より17:15までコアタイム 震:強震動、地盤振動、地殻応力はポスターのみ		16:30より17:15までコアタイム 震:地球熱学はポスターのみ	

	3月28日午前	午後	3月29日午前	午後
A	シ:遠方にある巨大彗 星の活動とその起源	総会 特別講演	電:モデリング・ シミュレーション	シ:合成開口レーダ の地球科学への応用
B	シ:西太平洋の 海洋環境		シ:固体地球と流体 地球のカップリング	電:磁気圏 (尾部)
C	共通セッション マグマ		地震 地震活動(1)	震:地震活動(2)、 歴史地震
D	電:電磁圏 (サブストーム)		震:地盤構造、重力、 地殻構造(1)	地震 地殻構造(2)
E	震:地震一般、 地下水		電:岩石磁気・古地磁気 磁気異常・主磁場	電:電気伝導度 地殻活動電磁気学
F	地震 地震予知		火:関東・西南日本 の火山	火:北海道・東北日本 の火山
G	三:鉱物・ 岩石・資源(2)		地化 地球化学	共:海底火山活動と 熱水・鉱化作用
H	共:地球惑星科学におけ る微量分析技術		惑星 惑星科学(III)	惑星 惑星科学(IV)
I	共通セッション テクトニクス		共通セッション テクトニクス	共通セッション テクトニクス
J	第四紀学会		共:地球深部の 物性と構造	共:地球深部の 物性と構造
Poster	コアタイムは29日12:15より13:00まで		12:15より13:00までコアタイム	